**歴史I シケプリ**

**インド概説　＜第１授業＞**

**基礎：**インドは1947年に独立（インド・パキスタン分離）をし、現在28州８連邦直轄地で構成されている。人口は約14億人になっている。

**言語：**インド憲法によると、連邦レベルの公用語はデーヴァナーガリー文字によるヒンディー語で、英語も連邦の公の目的のために継続して使用されている。州レベルでは州ごとに公用語がある。（Bengali, Marathi, Telugu … 合計で22）

　→ 憲法第８附属により州公用語を特定。＜14 → 22に逓増＞

**宗教：**ヒンドゥー教（79％）・イスラム教（14％）・キリスト教（2％）

**反差別政策：**宗教、人種、カースト、性別、出生地を理由とする差別の禁止を憲法に掲載

　　　　　　良心の自由、信仰の自由 + 固有の文化を保持する権利

→　カーストの議論はパンドラの箱 ＜非常に複雑＞

→　ニューデリーでテントを立て抗議する人々は社会的起源が様々

　　対立の軸：カースト、言語、宗教、階級 + ジェンダー

＜州の分離を求めるヒマラヤ農民・母語の第８附属への追加を求めるコンカーン人・首切りに抗議する工場労働者・農産物価格の低下を求めるマハーラーシュトラ農民などなど＞

**インド概説　②　＜第２授業＞**

**カースト：**「カースト」というのは、「カスタ」という家柄を意味するポルトガル語に由来している。したがって、インド本来の呼称ではなく、植民地主義の中で生まれた呼び方である。

**インドにおける呼び方：**

→ **ジャーティ：**＜生まれを同じくする者の集団＞

→ **ヴァルナ：**＜色＞インド古来の四種姓

アーリヤ人のインド侵入当時、肌の色がそのまま支配者と被支配者との区別を示した。

1. バラモン（司祭階級）
2. クシャトリヤ（王侯・武士階級）
3. ヴァイシャ（庶民・農牧商階級）
4. シュードラ（隷属民）

（その下にはヴァルナのない不可触民＜現：指定カースト・scheduled caste＞）

大事：４ヴァルナは社会の大枠を示したものであるのに対し、ジャーティは地域社会において独自の機能を果たしている集団である。（壺作り、洗濯屋などインド全体で2000〜3000）

「ジャーティは婚姻連帯によって結びついた単系出自集団：内婚と共食の単位。各ジャーティは衣食住や宗教実践の文化習慣を有する。それを超えた接触や共食の忌避は疫学的配慮による」

→ その一方で、ヴァルナはあくまでも理念上の枠組み。

例：ヴァルナの中間階級とされる「ヴァイシャ」や下位階層「シュードラ」は、ジャーティとの関係が曖昧になっていて、このふたつのヴァルナはほとんど意識されることがない。

例：ジャティーも、同じ集団名でも身分の高低は地域によって異なったり、ジャティー内部で分類が複雑だったりする。なので、インド社会を理解するのに唯一の鍵概念ではない。

ジャーティとヴァルナを合わせて、いわゆるカースト制が成立したのは7世紀ごろ。

カースト間の分業と交換で有機的社会結合　➡️　礼儀的ヒエラルキーと政治経済的格差

ジャティーの複雑さ：ガンディーはGujarat Vaniaであった。その中に４０種類のサブカーストもあり、ガンディーはModhであった。その中でもさらに地域によって３種類が。

**ヨーロッパ進出とカースト制：**

階層・職能による流動的な分類はヨーロッパ進出以前から存在していたが、その一部だけが現在カーストと知られているものとなった。今日我々がカーストと認識しているものは18世紀以降、社会秩序として明確化されてきた。

19世紀以降のイギリス支配　→　カースト社会の拡大・強化。イギリス人も主体的に参与。

インド憲法には、「カースト差別の禁止」、「不可触民制の廃止」の他に「指定カーストに対する教育・経済上の利益促進」もあり。

**ヨーロッパ勢力のインド進出と食の変化　＜第３授業＞**

**地域と食：**

南（半島部）× 北　→　乾季・雨季、米・雑穀　×　乾季・雨季・冬季、小麦

西から東　→　年間降水量増加

＜北西部、北部、東部、南部、西海岸部など食地域多々＞

食用油・ミルク・ベジタリアンの消費にも地域差あり。

**インド史でみられる地域：**

8世紀：ムスリム政治勢力の南アジア進出

　　　　　　　→ 人・物・知識の交流

13世紀〜16世紀：デリー・スルタン王朝（北インド）

　　　　　　　→ イスラームの普及に地域差

16世紀〜：ムガル帝国（アクバル　在位1556〜1605）

* 『アーイーニ・アクバリー』→ アクバル時代の宮廷料理を垣間見る史料

食材の流通。中央アジアやイランの料理の影響も。料理法を融合。

→　唐辛子は登場せず。（ヨーロッパ勢力の進出以降）

→　肉料理はあったが、牛肉と豚肉の記述なし。

アクバルは領土拡大と統治制度整備を成し遂げた。非ムスリムの人頭税（ジズヤ）を廃止し、非ムスリムの政治・社会勢力へ配慮した。アクバル自身も肉食を避けた。

**中世（ヨーロッパ勢力の進出以前の）インド食文化：**

それを知る手がかりが３種類：

1. 美術館の遺品

→ 厨房や材料を描いた絵画などが多い（石像、レリーフ、壁画、挿絵）

1. 文字資料

→ ヒンディー語とタミル語の古典以外にも、ペルシア語と中国語古典

→ 宮廷生活を指南する百貨店でアーユルヴェーダの体系：処方箋として薬膳料理

1. 伝存文化

→ 調理技術や食材知識を用いて、特定の地域と時代の料理を再現させる

→ 食材（穀物、ミルク、ノン・ベジ、マーガリンなど）の量でわかる地域的特徴

**ヨーロッパ勢力のインド進出と食の変化　②　＜第４授業＞**

16世紀に世界の交易網が発達したが、それは必ずしも世界を均質化したわけではない。

**ヨーロッパのインド進出の歴史：**

1498年：ガマの率いるポルトガル船団が喜望峰を回りインド南西部マラバール海岸に到達。

　　　　　→　インド西岸のゴアを奪って拠点とし、武力によって海上貿易の独占を図る

　　　　　→　香辛料がヴァスコ・ダ・ガマのインド進出の動機のひとつ

17世紀初期：イギリスとオランダがそれぞれ東インド会社を設立する

　　　　　→　各地の港市に活動拠点として商館（factory）を開設

17世紀半ば：フランスとデンマークも同様の動きをし、オランダはそれをさらに強化する

　　　　　→　オランダは当時、ポルトガルの勢力をマラバール海岸やスリランカで駆逐

17世紀末：オランダの勢力が衰退し、イギリスとフランスの間で対立が深まった

論点：ヨーロッパの拡大ではなく、参入　＜インド歴史の連続性を重視＞

**食材の伝播：**

アメリカ大陸からスペイン、ポルトガル勢力を介して中東やアフリカ、アジアへと農作物が伝播。その普及には、生産性や適応性、調理のしやすさ、召喚される文化イメージなど要因が複雑である。

→ 「コロンブス交換」：1492年から続いた東半球と西半球の間の甚大な物・人・病原菌の交換。

* 新世界の人々は旧世界の病気に対して免疫を有さなかった。スペイン人によるアステカやインカの征服の成功は主として病原菌のせいだとされる。
* コロンブス交換により得られたトウモロコシで中国の山間部の開発は可能になった。また、ジャガイモはヨーロッパの冷涼な地域で主食となった。

＜唐辛子＞：ポルトガル人の手でインドにやってきたが、短期間で南インドに普及した。北インドにはマラーター王国の勢力拡大で伝播。マラーター王国は、1674年にインド西部に築かれ、ムガル朝と対立した国である。18世紀に入ると、王国の実権はペーシュワー（宰相）が掌握し、王国はペーシュワーを頂点とし、各地の半独立的マラーター諸侯が結合する政治的連合体に（マラーター同盟）。これで支配領土を拡大し、北インドのムガル帝国まで侵攻していく。最終的には、マラーター戦争でイギリスに敗北。

＜その他＞：トマトやジャガイモもポルトガル人で伝えられたが、伝播したのはイギリス人が料理人に使い方を教えたのち。＜食材による伝播の仕方の違い＞

**料理法の融合：**

ゴアは16世紀からポルトガルに占領され、キリスト教の布教・改宗運動が普及。日本で有名なフランシスコ・ザビエルもそこで活動。ポルトガル支配は1960年代にインド軍による侵攻でついに終わり、ゴアは連邦直轄地に。80年代にゴア州が創設される。

現ゴア州の宗教　→　ヒンドゥー教（66％）・キリスト教（25％）・イスラーム教（8％）

ポルトガル支配下のゴアで発達した料理：

* 菓子：ポルトガルのケーキや焼き菓子に由来するが、インドで手に入れやすい材料で作られる。牛乳などをココナッツミルクに、砂糖をヤシ樹液の塊に、小麦粉を米の粉に代えた。
* ヴィンダルー（ゴア料理で最も有名）：ポルトガルの肉料理に由来している。

**「カレー」の概念：**

カレーの語源は、タミル語のkari、カンナダ語のkarilとされがちだが、カリは肉と野菜を指す。

「インド人たちは、スープに入った「具」を指して「カリ」と言ったら、ポルトガル人たちはそれを料理の名だと思い込んでしまった」＜ひとつの仮説＞

確実に言えるのは、「カレー」とは、ヨーロッパ勢力がインドの食文化に押しつけた概念である。

**ヨーロッパ勢力のインド進出と食の変化　③ ＜第５授業＞**

1600年：イギリス東インド会社設立　目的は交易（商館・軍隊）

　　　　　→ 在地勢力の争いへの関与、フランスとの対立

1757年：プラッシーの戦い（Battle of Plassey）

　　　　　→ 英仏対立：イギリス東インド会社×フランスとムガル帝国（ベンガル太守）

　　　　　→ イギリスの政治的権力が更に増幅し、フランスがインド撤退に近づく

　　　　　＊太守＝ムガル帝国の地方長官

1764年：バクサールの戦い（Battle of Buxar）

　　　　　→ イギリス東インド会社×ムガル帝国（アワド太守と前ベンガル太守）

　　　　　→ イギリスは勝利し、講和条約を締結させる

→ 条約を通じてインド東部でディワーニー（徴税権）を獲得

19世紀初期：ムガル帝国が分裂し、独立した領邦は条約によってイギリスの藩王国に

　　　　　→ 英領インド（直接統治地域）と藩王国（native state, 間接統治地域）が両立

　　　　　→ 藩王国は在地の支配者(藩王)と軍事保護条約を結び、イギリスが宗主権を握る

　　　　　→ 英領インドの中でも管区・州ごとに統治方針が異なった　＜例：アワド藩王国＞

1857年：インド大反乱（シパーヒーの反乱）

　　　　　→ シパーヒーとは、（東イギリス会社軍の）インド人傭兵のことである

　　　　　→ インド大反乱の原因：エンフィールド銃の問題　＜薬包紙に牛脂・豚脂を使用＞

　　　　　→ シパーヒーが蜂起しムガル皇帝を擁立する

　　　　　→ 1850年代に東インド会社に併合された藩王国の旧支配者も加わった

　　　　　→ 同年に会社軍はデリーを制圧し、ムガル皇帝は降伏した

　　　　　→ これにより、東インド会社の統治は廃止され、イギリス政府の直接統治に変わる

＊ヴィクトリア女王の宣言：臣民の信仰形態や慣習を尊重、インド人を官職に登用、など。

1877年：ヴィクトリア女王、インド皇帝に即位しインド帝国を成立

**イギリスの新しい統治理念・方針：**

在地社会の慣習の尊重　vs　文明化の使命「インド野蛮社会に啓蒙」

→ センサス、地誌、カースト調査などで地域ごとの慣習について情報収集し、規定する試み

→ 何を改めるかで矛盾が生じ、イギリス政府はジレンマ状態に

　 女性に抑圧的な慣習、カースト差別、不可触民問題、児童婚など　＜介入に消極的＞

→ 英語教育を受けた在地社会のエリートたちが仲介者になり、社会改革運動を起こす

→ やがてミドル・クラスの中からナショナリズムの動きが活性化する

→ ナショナリズムの動向は衣食住をめぐる認識、実践とも関連している

　 「共食・穢れ観念・衛生観念」を悪しき伝統と批判する

**「インド」とは？「ヒンドゥー教」とは？「地域」とは？**

**インド：**聖典言語であるサンスクリット語で「水流」を意味する

ヒンディー語正式名称は「バーラト」＜Bharat＞

**ヒンドゥー教：**複数の信仰を包括的に指す語

→ ヒンドゥー教を意味する適当な言葉がインドの諸言語にない

→ 多神教、神格も多種多様（化身する紙、諸相をもつ紙、女神もいる）

　　ブラフマー（Brahma, 梵天）：宇宙の創造

　　ヴィシュヌ：宇宙の維持　＜身体が青い＞『マハーバーラタ』でクリシュナが化身

　　シヴァ：宇宙の破壊

* ヒンドゥー教は一神論から無神論まで幅広く、どれが正統か異端かはっきりしない。
* 「宗教」という枠があとから当てはめられた
* 19世紀に欧州のインド学者が『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』を「発見」して精読し、そこで見出された哲学こそがヒンドゥー教の本質と捉えられるようになる
* インド発祥宗教の教え「ダルマ」（Dharma）

**地域主義・地域概念：**

ある地域に関わる宗教的、文学的、政治的、歴史的象徴。

→　各地域の境界線についての議論が活発に

→　植民地期〜独立後における州再編にも影響

**食からみるイギリスのインド支配　＜第６授業＞**

**インド食文化とイギリス人社会：**

* イギリス人はインド全域の料理を表す言葉としてカレーの名称を使っていた
* 「インドには少なくともカレーの３種類がある」と大まかな分類もしていた
* イギリス人家庭では、香辛料を調合した「カレー粉」が発達し、やがて製造・販売される

→ １９世紀以降、イギリス人女性の人数が増加し、イギリス人社会が再編される

　　イギリス人専用区域も増える　← 強い人種意識、悪臭を放つ空気に対する嫌悪

**支配者の食生活：**

・家事労働への依存：メムサーヒブ（女主人）と家事労働者（使用人）

1. 料理人の雇用：家のなかの他者
2. 食材の入手：使用人への依存・家庭菜園や家畜飼育
3. 調理の過程：衛生観念
4. 献立づくり：晩餐会

「汎インド料理」の発達？

* イギリス人の間で料理法に関する情報共有・伝播

→ アングロ・インディアン料理：インド各地の技と食材を取り入れたイギリス人の食

**植民地支配、ナショナリズム、食　＜第７授業＞**

植民地期インドの中間層における食をめぐる議論：肉食と菜食、飲酒

ガーンディーの自叙伝から：「イギリス人は肉食だから、我々を支配するのだ。だから、私も肉食をする決定をした。」

**植民地期以前のインドにおける肉食：**

『アーユルヴェーダ』→ 何をいつ食べるべきか、食べてはいけないか

　　　　　　　　　　→ 食に関する浄・不浄の観念：肉や卵は不浄　⇆　穀物や乳は浄

・古代においてバラモンも肉食をしたが、『マヌ法典』の記述で忌避の認識が広まった

**『マヌ法典』：**

* 「チャンダーラ（賎民）、豚、鶏、犬、月経中の女性、去勢者は、ブラーフマナ（バラモン）が食べるのを見てはならない。」
* 「ブラーフマナは口、クシャトリヤは腕、ヴァイシャは腿、シュードラは足。」

**植民地支配下での肉食、菜食に関する議論 ：**

中間層には西洋料理への憧れ（ガーンディー自叙伝・文明意識）× 伝統の優位性

→ 浄・不浄差別を批判する積極的な人、社会的地位を失うことを恐れる消極的な人、場によって対応を変える人々。（女性の方が、良き妻良き母としての女性像で変革に消極的な傾向がある）

**ガーンディーの食に関する見解：**

* ガーンディーの家は藩王国の官僚職を務める家柄（1869年生まれ）
* 両親はヒンドゥー教で厳格な菜食主義
* 高等学校の時にイギリスの支配と肉食とを関連させて、親に隠れて肉食を試みる

→ イギリス留学（1888年〜1891年）に先立ち、肉、酒、女性を禁断すると誓う

　　ロンドンで菜食主義に出会い、以降は自らの選択でそれを選ぶ

**ガーンディーと牝牛の保護：**

「牝牛を崇拝。牝牛はインドの保護者。しかし牝牛のために人は殺さず。牝牛を守るためにはムスリムに要請、説得。牝牛保護の強要は逆効果。」← 屠畜問題に関して

＜州のレベルで牛の屠畜に関する規制に差異

**インドの消費傾向：**

* インド人口全体の３割はヴェジタリアン
* 宗教：ジャイナ教徒（９割）・ヒンドゥー教徒（４割）・ムスリム、キリスト教徒（１割以下）
* カースト：指定カーストは低く、バラモンは高い
* 地域：東部、南部は低く、西部・北部は高い
* ジェンダー：いずれの宗教においても、女性の方がヴェジタリアンの割合が高い

**1980年代後半から台頭した「ヒンドゥー・ナショナリズム」：**

→ 牛肉食（地域によっては肉食全般）に対する激しい批判

例：ヒンドゥーナショナリズム勢力による、ムスリム、ダリトへの牛の屠畜を理由とした攻撃

例：公の場での肉の料理・販売を禁止する市自治体の動き

例：住居探しの際に「ノンヴェジタリアン」を理由に断られる事例

ヒンドゥー（多数派）の文化・伝統を尊重すべき × マイノリティの自由を保障すべき

**飲酒をめぐる議論：**

19世紀後半：植民地支配下で酒税制度の導入　＜禁酒＝ナショナリズム ← ガーンディー＞

　　　　　　 → 製造・販売は許可証をもつ人々が独占。品質低下、価格上昇。

　　　　　　 → 農民は大抵抵抗。インド人エリート、アメリカ・イギリス人宣教師は支持。

**「インド料理」とは：**

インドでの国民料理の創造はポスト植民地期。「人的交流やモノ・情報の流通を背景に、各々の地域や社会集団と結びついた料理・調理法が都市中間層の間に広く伝播、共有。「インド料理」の形成を促す。」

**宗教と食　②　＜第８授業＞**

**イスラームの食の規範：**

* 1. 豚肉を食べること、酒を飲むことの禁止
	2. ラマダーン月（ヒジュラ暦9月）の断食

→ クルアーンで禁止されている：死肉、血、豚肉、およびアッラー以外に供えられたもの

北インドのスンナ派に質問する：靴を履いたまま食事をして良いのか？

答え：預言者の言行には、座して食事をする場合、靴を脱いだほうが安らいでよいというものがある。またイスラーム法にも食事中は靴を脱げとある。椅子に座って靴を履くというならば、それはキリスト教徒独特の方法で、これを避けた方がよい。

**ウルドゥー語小説『時の申し子』：**

イギリス人を家にかくまったヒンドゥーがムスリムの友人と話す。ムスリムは「鍋は別々にしたのか」と聞く。「イギリス人は食事に禁忌なものはない」と回答。逆にヒンドゥーがイギリス人の家に行くと、食事をすることを躊躇して断る。

イギリス人は調理の仕方に関するカーストなどの制約を慎重に考慮していた。鉄道駅はヒンドゥーとムスリムの乗客が別々の水運搬人から水を供給された。

**ゾロアスター教：**

* 預言者ゾロアスター（ザラスシュトラ）、『アヴェスター』善悪二元論
* イランからインド西部へ移住（8〜10世紀）→ 「パールシー」
* ヨーロッパ勢力のインド進出に伴い、経済的社会的地位の上昇（翻訳や仲介）
* イギリス植民地期に多くのパールシーがボンベイに移住し、英語で教育を受ける
* 現在はインド総人口の0.03%
* 19世紀後半〜：パールシー中間層向けの料理書
* パールシー知識人による「自分たちの歴史」：インドへの忠誠心、貢献などを強調

**シク教：**

* ナーナク：初のグル（1469〜1538）
* 唯一神、偶像崇拝否定、平等を主張
* 5つのK：髪、櫛、短袴、腕輪、懐剣（kesh, kangha, kachera, kara, kirpan）は必携である
* シク内部の多様性：宗派、信仰対象、カースト → 植民地支配でアイデンティティ再構築
* 印パ分離独立、パンジャブ州分割 → 「カーリスターン（清浄な地」シク独立国家要求

**ジャイナ教：**

* ジナは勝者（苦行、完全な知）
* ジャイナはジナの教え
* 5つの戒め：不殺生、真実、不与不取、不淫、無所有（禁欲主義）
* 空衣派、白衣派
* ヒンドゥー教にとってジャイナ教はヒンドゥー教の流派のひとつ

**仏教：**

* ブッダ（悟った者）
* バラモン主義、カースト的身分秩序を批判
* 仏教は教団として衰退し、ヒンドゥー教に吸収されていった
* アンベードカルによる仏教解釈　→　不可触民の間での集団改宗

→ 仏教徒がバラモンによって不浄。古代のアリーヤは仏教を模倣して肉食をやめた。

* ネオ・ブッディズム運動

**カーストと食：**

昔、ダリトは牛が死ねば、たむろしてそれを食べようとしていた。経済的地位が上昇してくるにつれて、豚や山羊、鶏など、社会的により受け入れられている肉の消費に移っていった。

ジャイナ教はインドの中でも菜食主義が非常に厳格。イチジクやキャベツなど、昆虫が入っている可能性のある果物・葉物も食べることを避けられている。夜は誤って虫などを殺して食べる可能性があるので、日没後は断食をする習慣がある。

**ジェンダーと食：**

* 植民地期の中間層における議論、言説：

男性：外・世界、近代、物質的領域

女性：家、伝統、精神的領域

「良い台所が良い妻を、良い妻が健康的な料理を、そして健康的な料理が強力な国家を作り出す」「国家への奉仕」

**衣からみる植民地期インド　＜第９授業＞**

**南アジアの衣服：**

* 巻布式の衣服：サリー（女性用）、ドーティー（男性用）、ルンギー（スカート）
* 裁断・縫製した衣服：クルター（ドレスっぽいシャツ）、パージャーマー、サルワール

ターバン：シク教徒だけでなく、ヒンドゥー教徒も被る。地域による。巻き方で社会集団の差異を示せる特徴。どの地方出身か、どのカースト民かなど。

植民地期における西洋の衣服に対する態度

* 態度は様々。エリート層はヨーロッパの布を使用しつつ、インドの衣服のスタイル。
* インドとヨーロッパの衣服を混合。場によって変える。欧風を全面的に受け入れる。
* 地域や宗教、カースト、ジェンダー、人生の段階、階層、教育などによる。

**サリーの近代化：**

1880年代からインド人女性はサリーの下で上半身を隠すレースなどを着用していた。当時のイギリスはヴィクトリア朝期、インドに来たイギリス人官吏などが属す中流階級の眼差しにさらされていた。サリーの近代は、様々な非縫製衣が、ある程度のヴァリエーションはもちつつも、標準的な形へと変化していく過程だった。やがて1920年代になると、こうしたサリーの標準化を前提とし、民族運動や女性運動と結合しつつ「民族服」が生まれる。ガーンディーのサリーにシンプル半袖胴着の組み合わせが、民族主義者、あるいはその妻、母、娘の正しい衣服と見做されるようになった。

**ベンガル分割令（1905年）：**ベンガル管区を東西に分割

→　ベンガル分割への反対運動、スワデーシー運動（swadesh, 自己の国）

　　外国産製品ボイコット、国産品愛用

　　ドーティーの着用（イギリス布のボイコット）

**ガーンディーの衣服の変遷：**

* イギリス留学時代　← 西洋服を積極的に着用
* 南アフリカ時代　　← インド人に対する差別に直面

　　　　　　　　　　 裁判所でのターバン着用問題：脱帽を拒否する

　　　　　　　　　　 剃髪、ルンギー、クルター着用により労働者への哀悼を表明

* インド帰国後　　　← 手紡ぎ、手織りの奨励　＜スワラージとスワデーシー＞

「女性たちが紡ぐ糸で織られることと、そのカーディーを人々に着せることが私の気持ちであり、運動なのです」「工場主が事業を縮小しなくても、人々は自分で機械製品を使用しないようにすることができます」

**ガーンディーの女性観：**男女の役割分担を明確に分ける

* 女性こそが非暴力を体現　＜ahimsa　非暴力＞
* 母としての女性、女性の愛情、忍耐強さを強調
* 女性の運動参加を促進　　禁酒運動、手紡ぎ、手織り、カーディー着用

**ヒジュラー：**インド各地に様々な呼称の下で存在 (北インドでJogappa, タミルでAravani等)

→ 肉体的には男として生まれ、社会的には男でも女でもない第三の性をもつ者として扱われている。一般的には去勢手術をし、「ユーナック」(eunuch)というカテゴリーに入る。

→ 古代インドでは子の誕生や結婚式を祝福していた記録があるが、英領期に入ると、性的逸脱者として公共の場から排除されるようになった。これ以降、ヒジュラーに対する偏見は強く根ざしている。

→ ヒジュラーはグルの下で、女神の召使として生計を立てることが多いが、物乞いも第二の道になっている。これも差別の原因のひとつである。特に都市部では売春のみを生業とするヒジュラーが多く存在し、HIV感染の確率も高まる。社会的に周縁化された存在。

**住まいからみる植民地期インド　＜第10授業＞**

現代インドの住居：

* 屋根の形状に地理的気候的条件が関わっている＜モンスーンは傾斜、乾燥地帯は平屋根＞
* 経済的条件：泥のブロック → 焼成煉瓦や岩石のブロック　→ コンクリート（都市部）
* 大地主層の邸宅：社会的地位の誇示のために住居を囲む高い壁を築く
* 住居の構造：庭・客室・居室の配置も南北で異なる ＜ヒマラヤ山麓地域に一階は家畜＞

女性が月経中で台所に入れなかったり、表の戸を行き来できなかったりする

　　　　　　ムスリムの影響が強い北インドでは、カーテンで仕切られた部屋は女性専用

**植民地期インドの都市における住まい：**

* コロニアル建築 ＜権力、西洋近代の象徴＞
* 古典主義様式、ゴシック様式（例：ムンバイ大学）
* 在地の要素の取り込み：インド・サラセン様式 ＜Indo-Gothic＞

→ 支配者と被支配者の空間

* ホワイト・タウン（白人居住区）
* ブラック・タウン（インド人居住区）
* シヴィル・ラインズ（植民地官僚たちの居住区）
* ヒル・ステーション（避暑地）
* バンガロー（建物の周りにベランダのついた平屋、ベンガル）

**ボンベイ市の例：**

1534年：ポルトガル支配下に

1661年：イギリスに譲渡 ＜東インド会社＞

18世紀〜19世紀：マラーター戦争でイギリスの勝利（×マラーター同盟）

19世紀後半〜：綿工業が発達し、「東洋のマンチェスター」となる

　　　　　　　 港市として世界とつながる（蒸気船、スエズ運河）

　　　　　　　 インド各地とつながる（鉄道網発達）

　　　　　　　 人口の増加 + ホワイト・タウン、ブラック・タウン

　　　　　　　 インド人富裕層が白人居住区に居住することも

「バンガロー」が世界中に伝播される。日本では幕末〜明治初期で外国人居留地、明治末期で中流階級向けの住宅モデルとして使用されていた。

**住まいからみる植民地期インド　②　＜第１１授業＞**

ガーンディーの住まい：

南アフリカ時代　→　トランスヴァールでトルストイ農場での共同生活

　　　　　　　　　　ガーンディーはトルストイと書簡交換をしていた

　　　　　　　　　　女性たちによる調理と共食、飲酒とタバコの禁止

　　　　　　　　　　糞尿用の穴、肥料としての利用

　　　　　　　　　　バラモンとして糞尿を掃除する　← カースト・タブーを打破

インド帰国後　　→　1915年　アフマダーバード市にアーシュラム修行所を設立

　　　　　　　　　　不可触民の家族も受け入れながら、共同生活

　　　　　　　　　　共有井戸の使用が困難になり、金銭援助を停止

　　　　　　　　　　アフマダーバードを出ずに不可触民と一緒に住むか、力仕事をする

1919年：　サーティヤグラハからサーバルマティー・アーシュラムに

1930年：　塩の行進に出発（イギリスによる塩の専売に反対した運動）

アーシュラムとガーンディーの考えた「自治」（スワラージ）

アーシュラムにはちゃんとした共同便所を設置し、その大便を堆肥に使い、村人の主食であるサトウキビや野菜を植える。

「スワラージ」の基盤は、全ての村が自立し、自分のことは自分で管理できるような社会を築くこと。外部からの攻撃に対して自分たちを守るため、滅びへの訓練を受け、準備をすること。これは、隣国や世界からの依存や進んだ援助を排除するものではない。それは自由で自発的な相互の力の発揮である。